

千里の鳥・万博の鳥(第93回)「モズ幼鳥」(2020年8月)

モズは体長20cm、食べ物がすべて小動物～昆虫の肉食であり、エサ取りに適した嘴の形はタカのように鋭く鉤型に曲がっている。

モズは日本列島～朝鮮半島などで生息しており、大阪府内では一年中見られる留鳥である。万博公園でも探鳥会をスタートした1980年代は留鳥であり、モズの子育てを観察していたが、1995年頃から繁殖期にモズの姿が見られなくなり、秋にモズの高鳴きでモズがいることを知る冬鳥に変化していった。

万博公園は1970年の大阪万博のパビリオン跡地に木が植えられて公園となったが、当初は木が小さくモズの好む草はらがあったが、植えられた木が大きくなるとともに草はらが無くなり、モズの繁殖適地でなくなったためであった。

モズは昔から田んぼや畑、そしてため池や林のある里地、生活圏の近くに住んでいたことから、人々はモズを良く知っており、モズの特徴からいろいろ話題を提供している。

まずモズの名前を漢字で書くと「百舌鳥」、色々な鳥の鳴きまねができることから、「百の舌を持つ鳥」となったとのことである。大阪府堺市に百舌鳥とつく地名が多いが、日本書紀では仁徳天皇陵建設時まで遡るとのこと、地図を広げ「百舌鳥」を探すと楽しみが加わった。

そして秋には「モズの高鳴き」、木の天辺や住宅のテレビアンテナなど、周囲で最も高い場所から「キー、キー」と、甲高い声で鳴く姿は秋の風物詩となっており、俳句の季語として有名である。

更に、晩秋は冬の餌といわれているモズ「はやにえ」、カエル・トカゲ・コオロギ・バッタなどの小動物が木の尖った枝先や有刺鉄線の刺に挿されている。餌の少ない冬に備えて貯蔵しているといわれていたが、「はやにえ」のその後を見ていなかったのが半信半疑でした。

大阪市大西田有佑博士の研究で、①モズの雄は非繁殖期にのみ「はやにえ」を作ること、②その「はやにえ」を繁殖期が始まるまでにほとんど食べ尽くすこと、③「はやにえ」消費量に応じて繁殖期における雄の歌の質が高くなること、④その結果、雄は雌から強く好まれるようになることなど、雄は雌にモテるために「はやにえ」を食べていたことが分かった。

モズは他の小鳥より早く3月には繁殖準備、低木の茂みなどで巣作りを始める。抱卵2週間、育雛2週間で巣立ちするので、4月後半に巣立ち雛が見られている。

今回、有賀氏により30年ぶりにモズ幼鳥が万博公園で確認されたことになるが、春からこれまで観察されなかったこともあり、万博生まれかどうかわからない。

いずれにしてもこのモズの雄親が、「はやにえ」を食べた雌親とカップルになったと思うと、嬉しくなってくる。

**** 写真 ****

種名:モズ幼鳥

撮影日:2020年7月16日

場所:万博公園

撮影者:有賀憲介

8月探鳥会は夏休み

冬と同じ羽毛をまとっている鳥は暑い夏が苦手、あまり動かず見つけにくいこともあり、コロナ禍の前から8月探鳥会は夏休みとしていた。

今月も、紙上バードウォッチングで「モズ幼鳥」を楽しんでくださるよう、お願いします。

(参考)

「はやにえ」研究に関する大阪市大プレスリリース

<https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/news/2019/190513>

